



尼崎市

お問合せ先

尼崎市 シティプロモーション推進部 シティプロモーション事業担当

TEL : 06-6489-6385 (イベント時 06-7163-7108)

FAX : 06-6489-6793

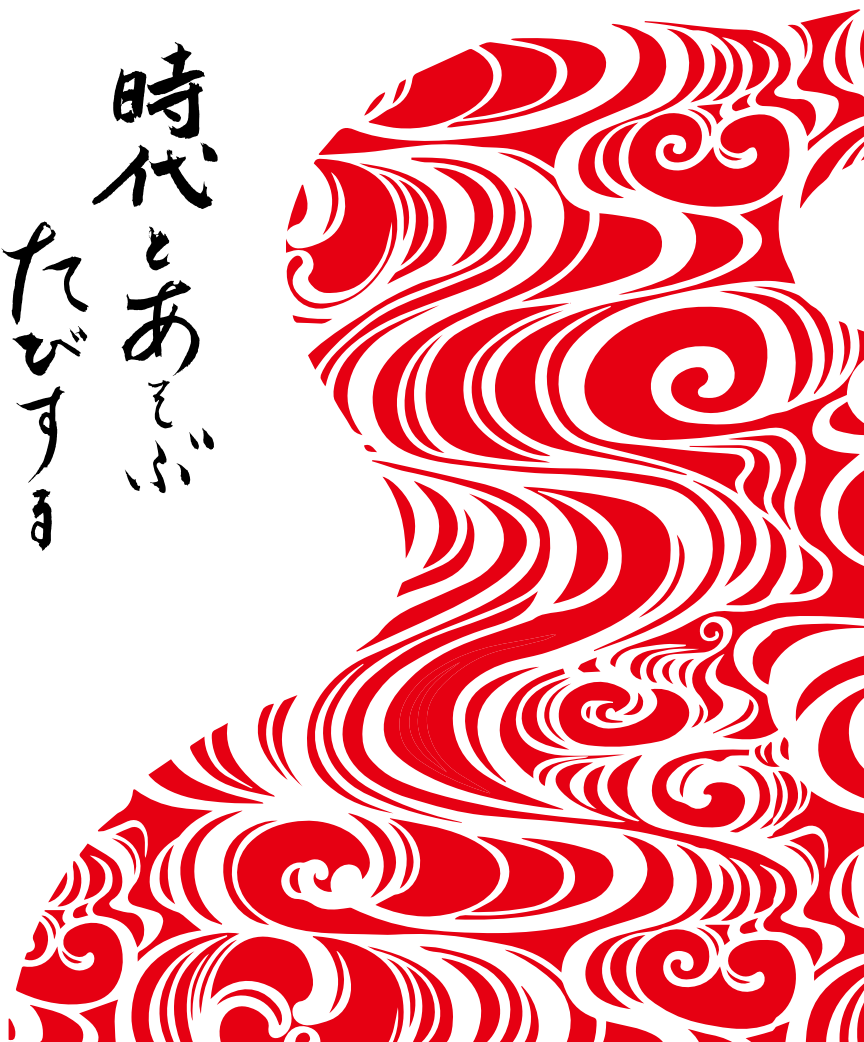
E-mail : amalove.a.lab@gmail.com

archive
vol.17

A-Lab Exhibition Vol.15

山本 太郎展

時代とあそぶ
たひす
つくる



あまらぶアートラボ A-Lab Exhibition Vol.15

尼崎城プロジェクト関連企画

時代とあそぶ たびする つくる

山本太郎展

■目次

出展作品	03
トークショー「時代とあそぶ 地域をくすぐる」	15
作品探検ツアー	26
フライヤー・会場配布資料	27

A-Lab ☒ Exhibition Vol.15
山本太郎展





山本 太郎（やまもと たろう）

1974 年熊本生まれ。2000 年京都造形芸術大学卒業。京都造形芸術大学准教授。

1999 年に日本画ならぬ「ニッポン画」を提唱。日本の古典絵画と現代の風俗が融合した絵画を描き始める。近年は企業等と積極的にコミッションワークを行いキャラクターを使用した作品も多数制作している。その作風は現代の琳派とも評される。2015 年京都府文化賞奨励賞受賞



《アケオメリクリ 山本太郎の紅白の階段》 カッティングシート / サイズ可変 / 2018

Project 1 アケオメリクリ

階段、廊下

2017年12月から2018年1月にかけて、秋田公立美術大学サテライトギャラリー・ビヨンポイントを、クリスマスとお正月の象徴である紅白の空間に変えたプロジェクト、アケオメリクリ。その壁面のデザインには、尾形光琳の国宝「紅白梅図屏風」を現代的にリミックスした山本の作品「清涼飲料水紋図」が用いられました。今回、そのプロジェクトをA-Lab仕様に作り変え展示します。また、ビヨンポイントでは展覧会会期中にクリスマスパーティーを開催しました。作品を舞台に秋田舞妓が舞うなど、その時の模様を映像で紹介します。



左：《清涼飲料水紋図 Red & White》紙本着色金彩 / 53 × 33.3cm / 2018
右：《清涼飲料水紋図 Strawberry Moca》紙本金地着色 / 33.3 × 24.2cm / 2018

万国旗ゾーン

廊下



左：《つきのわぐまパンダカー》紙本金地着色 / 33.3 × 53cm / 2017
右：《万国旗 楯図》紙本金地着色 / 24.2 × 33.3cm / 2011



Project 2 熊本ものがたりの屏風

room1

2016年の熊本地震で被災した襖表具材料店から、捨てられることになっていた屏風などを山本が譲り受けて修復し、そこに公募で集められた熊本に住む人々の思い出の品々を描いたプロジェクトです。



左から順に：《熊本ものがたりの屏風 みんなの思い出腰高屏風》 紙本金地着色 / 各 117.5 × 90cm、二曲一隻、三対 / 2017
 《熊本ものがたりの屏風 いと小さきもの小屏風》 紙本金砂子着色 / 36.5 × 91cm、二曲一隻 / 2017
 《熊本ものがたりの屏風 女性のハレの日金屏風》 紙本金地着色 / 168 × 186cm、三曲一隻 / 2017
 《誰ヶ袖図屏風 模ホノルル本》 紙本金地着色 / 152.2 × 365.2cm、六曲一隻 / 2016



《山本太郎图案 芸艸堂制作 マリオ & ルイージ図木版画》©Nintendo 山本太郎 2015
木版画 /66 × 30cm(絵寸)/2015

Project 3 コラボレーションプロジェクト

倉庫

山本と手摺木版和装本出版社の芸艸堂、ゲームメーカーの任天堂、男のきものえいたろう屋や陶芸家、宮川真一氏とコラボレーションして生み出した木版画や浴衣、茶碗などを展示します。



《アイコン柄浴衣》注染 / 男性用浴衣 / 2012

《ワラ灰釉 玩具の絵茶碗》13.2 × 6.7cm/2011/ 個人蔵
《ワラ灰釉 富士に新幹線図茶碗》11.2 × 8.8cm/2014/ 個人蔵

■「時代とあそび たびする つくる」山本太郎展





《八木沢番楽幔幕》木綿 染色 / およそ 530 × 190cm / 制作年不明

上小阿仁村八木沢地区公民館蔵

《平成版八木沢番楽幔幕》ポリエステル布にプリント / およそ 530 × 190cm / 2017

上小阿仁村八木沢地区公民館蔵

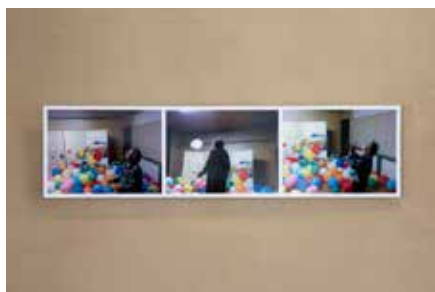


Project**4** 平成版八木沢番楽幔幕 (かみこあにプロジェクト 2017)

room3

マタギの里として知られる秋田県上小阿仁村。ここで 2012 年から始まった芸術祭「KAMIKOANI プロジェクト秋田」(2016 年より「かみこあにプロジェクト」と改題)に初年度から参加している山本が、2017 年に限界集落である八木沢地区に伝わる郷土芸能「八木沢番楽」のための新しい幔幕を制作しました。それまで使われていた幕と新しい幕、そして新しい幕のために描かれた原画を展示します。





Project 5 羽衣バルーン (KAMIKOANI プロジェクト秋田 2014) 和室

能楽の「羽衣」のクライマックスで、天女が自分の羽衣を返してもらい天人の国に浮遊しながら帰るシーンを風船で表現した「羽衣バルーン」屏風。その屏風のまわりに、たくさんの本物の風船を置いています。観客のみなさんは、その中に入って風船で遊んだり、そこから風船をひとつだけ持って帰ることができます。その代わりとして、その場で新しい風船を作って補充していただくなど、作品と観客が双方向的に関わることを目指したプロジェクトです。

トークショー「時代とあそぶ 地域をくすぐる」



出演
日時
場所

藤本智士氏（編集者）、山本太郎氏（出展作家）
平成 30 年 10 月 20 日（土）15 時～16 時 30 分
あまらぶアートラボ A-Lab room1

藤本さんのこと

山本太郎（以下 山本） 藤本さんのことを知らない人も多いので、まずは自己紹介をお願いします。

藤本智士（以下 藤本） 編集者というのが自分の肩書で、本を作ったり雑誌を作るのが基本的なお仕事です。こういう仕事は、大体出版社が東京にあるので、僕の同業者はみんな東京に行っちゃうんですけど、ぼくはずっと関西にいます。その方が、勝ち目があるなと思っていて。

山本 それは若い時からですか？

藤本 そうです。ずっと、思っていました。東京に行くっていう欲望がなくて。それよりも地方と地方が繋がっていく時代みたいなものが僕のビジョンとしてはあったので、大阪や兵庫にいながら、長野の仕事をやる、福岡の仕事をやる、秋田の仕事をやるみたいな、もはや東京をすっとばして、地方と地方が繋がって盛

り上がっていくみたいな世界がきっとくるだろうというのをなんとなく思っていました。

僕は「編集」というフィールドは、圧倒的にメディア、出版社とかが東京に集中しすぎているんですけど、東京の大きいメディアを介してしか全国に発信できないっていう時代じゃなくなるっていうのを感じていました。10 年前、15 年前だって、すでに皆ブログとか言い出してるわけで。

山本 そうか。時代感覚が追いつかないけど、15 年前って、ブログが出始めてるんですね。

藤本 そう。気づいたらね。そういう時代になっているから。

山本 それは藤本さんが編集やっていたからすばやく感じ取ったっていうのはあるのでしょうか。普通の人にはそこまで感じてなかったかもしれないし。スマホでこんなに繋がる時代になるっていうのをあの時予見している人は少なかったですよ。

藤本 ゆうてもパソコンの時代だったから。今パソコンすら若い人持っていないじゃないですか。情報発信していくとか、何か伝えるっていう時に、東京の出版社だけが、全国に発信するんですね。出版社だけでなく、テレビ局もですけど。「東京のメディアだけが全国発信してるのに、他の地方のメディアはなんで全国に発信しないのか。」っていうすごいシンプルな疑問。したらええやんっていう。関西で言うと、Meets とか Lmagazine とか地域情報誌みたいなことで、そこで経済を動かしていくっていうことに終わっちゃうんですね。でも実は、「どこからだって全国の皆さんにお届けしてもいいじゃん」というふうにぼくはずっと思っていたので、今もそういう意味では秋田とか熊本もそうだし、兵庫に住みながらずっとやっているというのは、そういうことができる時代になってきたんだなと思います。

二人の出会い

山本 お互いに、京都と兵庫を拠点に活動していたんですけど、知り合ったのが秋田なんですよ。秋田で出会ってしまった。

藤本 太郎ちゃんはいつから秋田で先生していたの？

山本 5年前なので、2013年で、秋田に行き出したのは2012年とかなんです。

藤本 僕は「のんびり」という秋田県庁の発行物があって、その編集長を2012年から2016年までの4年間やってたんですよ。これ自体は4年で終えて、今は秋田県発行のwebマガジンになっています。その編集長を今も務めているので、僕はいまだに秋田に月1、2回は行ってるんですね。僕も2012年くらいに「のんびり」きっかけで、秋田に行くようになり、太郎ちゃんも美大の教員になって。最初は、「のんびり」の取材で、日本酒の純米酒の特集をしたのがきっかけですね。

熊本とそれぞれの関わり

藤本 同い年で感覚的に近いところがあるので、余計に仲良くなったっていうのがあるんですけど、熊本に関しては震災のことがなければ太郎ちゃんが熊本出身だっていうことを知らなかったです。京都の人っていうイメージで、ずっと関西の人だと思ってたから。

山本 そういうイメージで売り出してますからね。

藤本 震災があって、僕も秋田に限らず日本中色々な地域を回って、記事を書いたりっていうのが仕事なので、色々な土地に行くだけに。

山本 熊本はなんのお仕事だったんですか？

藤本 色々な地域に友達がいっぱいいて、東北の震災の時もそうだったけど、どこにしようと、友達にいたら心配じゃないですか。「大丈夫かな？」っていう。それで、熊本も今まで取材のご縁とかで友達もたくさんいた町なので、シンプルに心配だったし、なにか出来ないかなって思っていました。震災を機にお客さんが減ったりっていうことが絶対あるから、自分なりにガイドブックみたいなものをつくれればいいなと思い、なんのあてもなく、一回熊本に行って、友達に案内してもらったりとかして、実情を色々みて、やっぱり大変なんやっていうのを肌で感じました。帰ってきて、本を作ろうと思っていたところにたまたまアミューズさんっていうお世話になってる東京の芸能事務所の方から連絡があったんです。俳優の佐藤健くんが自分で企画して熊本の本を作りたいということだったんですけど、熊本で佐藤健くん主演の「るろうに剣



藤本智士さん

心」の撮影をおこなっていたり、剣心の師匠のモデルの人が、熊本の人っていうのもあったりして、そういう話で編集してもらえないかっていう話だったので。

山本 そこでリンクしたんですね。

藤本 ちょうど、僕が行った話をしたときに、それじゃあっていう話になって。取材先とかアテンドして、原稿書いてみたいな。

山本 健くんが熊本を巡りながらっていう本ですよ。いわゆるガイドブックに載っている観光地だけでなく、色んな場所が載ってましたもんね。

藤本 僕、その前身で「ニッポンの嵐」というジャニーズの嵐のメンバーと一緒に全国回った本を作ってそれを色んな芸能事務所の人たちがみてくれていて。当時、いわゆるタレント本じゃなくて、ガチでドキュメンタリー性のある本ってなかったというか。僕「のんびり」でも、元々つくってた「Re:S」でもそうなんですけど、あんまり決めないんです。台割っていうのを書かなくて、行き当たりばったりで、アボも取らないんです。ガチで行って、ドキュメンタリー的に拾ってくるっていうことをいつもするんですけど、さすがに嵐や健くんってということで100%はできないけど、行き当たりばったりで現場で決めていくっていうことをやっていきました。結果的にちょっと違う毛色の、でもガチの出会いだから、本人達のテンションの上がり具合も全部そこに込もっているんで、そういう意味では温度の高い本ができるっていうので、健くんの本



山本太郎さん

もそういう感じの本に仕上がりました。

山本 あれは熊本の人めっちゃくちゃ喜んだと思いますよ。

藤本 売上を熊本の復興支援にって言ってるのに、熊本の人がナンバー1買ってくれたんです。

山本 自分たちでお金を落として、自分たちの復興支援をするという。それもいい感じですけどね。

打ち合わせの時にどなたかと話していて、「アートはいいですね早くになにかができるからね」と言ってもらったんですけど、僕は全然それとは違う感覚で。絵を描くとか、ものを作る方のアーティストって、全然スピード感がないなっていう感じだったんですよ。なにか災害が起こった時に、歌う方のアーティストさんって、すぐ現地入りしたりして、歌うたってみたりとか、復興支援のコンサートとかもわりと早めにできちゃうじゃないですか。でも絵描きって、ものが出来上がらないとなんにも動けないから、それこそ手持ちにあるもので展覧会やってその収益を復興支援にとかっていうのは何度かやりましたが、それに直に関連した事を伝えるっていうのはすごい時間がかかるので、なにかできるのかなっていうことを悶々と考えている時間が長かったです。でも出身地だし、なにかしたいっていう思いだけはずっとあって。そしたらたまたま高校時代の一個上の先輩が、地元で建築士をやっていて、その人は古いお家とかを保存する方をたくさんやっているような人だったので、ここ（room1）に並んでいる屏風を扱っている、熊本でも一番老舗の表具とかの材料屋さんとか知り合いでした。そこは、建物自体が古いけど、直したら費用が莫大にかかるからそれは無理だということで、更地にしようという話になってて。

藤本 それはもうご商売をやめちゃうということで？

山本 そうなんです。代がちょうど代わったばかりで、女性の方が細々とやっていました。先代の方が表具屋みたいなことをやっていて、材料を売るだけじゃなくて、自分で掛け軸もされるような方だったんだけ



熊本ものがたりの屏風 みんなの思い出腰高屏風

れども、その先代もご病気されてて、結局地震のすぐ直後に亡くられるんです。そういう経緯もあるし、廃業をして建物も無くすと。その時にこういう屏風とかっていうのも、捨てるにしてもお金がかかるので、建物を壊す時に全部廃棄してしまうということで、この辺に並んでいる屏風は捨てられる予定の屏風だったんですよね。さすがにそれはいかなものかというのがあるって、引き取ることになり、そこからスタートしてるんです。引き取ったもののいくつかは本当にボロボロで。屏風って形状的に本と一緒になので、意外と内側は大丈夫なんです。でも閉じられている外側は、ビリビリに破られていたりして。この屏風も3つじゃないですか。屏風って本当は偶数で増えていくんですよ。2、4、6、8とかありますけど、これは3じゃないですか。本当は4つあったんですよね。4つ目は間を紙で細工してつなげてあったんです。このつなぎ方にプロの技があったりするんですけど、そこがもうビリビリに破れて取れてたんですよね。それならば直す時に4つめを新たにつなぐよりも、3つで屏風にしちゃったほうが、震災というかそういうものの記憶と

しての屏風だよっていうのをちゃんと残せるんじゃないかと思って、この形式にしました。

藤本 アートは時間がかかるって言うんだけど、時間をかけることでアーカイブされるじゃないですか。そこにすごい意味があるし、屏風の中に皆さんの思い出を、記憶を残すというのは、ある種の写真みたいやなって思います。東北の震災の時に、あそこは津波が大変だったので、泥だらけの写真を洗って乾かして持ち主に返すっていうのが自然発生的に各地であって。それを2年間くらい取材し続けていました。その時に、写真って、ひとつわかりやすかったのは、泥だらけのアルバムとか写真とかが、各土地ごとの体育館に集められるんですね。そこでボランティアをしている人たちがひたすら洗浄して乾かしていくんだけど、そうすると、いっぱい泥だらけのアルバムとかが並んでるわけ。それは小さなポケットアルバムから、しっかりしたものから卒業アルバムから、額に入った写真から、色んなものがあるんだけど、その時にはっきりしたのが、ここ10年の写真がそこにはほぼ無かったんです。デジタルになってから皆プリントしていないという

ことが露呈してたんです。皆データの方が残るとか、サーバーにアップしておけば津波にあわないみたいなこと言うんだけど、あれは死んじやったらパスワードもなんもわからへんから、無いに等しいんです。持ち主に返すって動きの時もそうなんだけど、「あ！これ誰さん写ってるやん！」とかって言って持って行ってあげるみたいな感じで、“物”としてある強さがすごくて、だからこそ震災直後に、その写真を見たくない人っていうのもたくさんいました。だからそれは善し悪しだったんだけど、きっと10年、20年たって、自分が生きてきた証っていうのが欲しいなっていうときにそれがあっていうのはすごい大事だと思って。そういうのを見たときに、写真が持っている力、アーカイブが持っている力っていう物としての力とかっていうのをすごく痛感しました。この1枚の1つの作品の中に何人かの人たちの思い出がつまっていたりとか。

山本 そうですね。そこがやっぱり人間の人間たる所以で、生活基盤は、時間が経っていけば、家建て直すとか、ライフラインつくるとか出来ると思うんですけど、人ってそれだけで生きてるわけじゃないから。

藤本 自分が生きてきた証がなにかしら残るってことっていうのは生きていくうえですごい大事な事なんだなって思って。本当にこういう風に、ひとつのモチーフがそこに残されるっていうだけなんだけれどもそれだけじゃないって言うか。きっとその人たちが前を向いて生きていけるってことにこの作品っていうのがすごい課されていると思うので。

山本 さっき言ったみたいな、経緯で話っていたいた屏風なので、その上に自分の自己表現をするのは違うなと思ったんですよ。熊本の人たちで当然地震にあって、さっきの写真じゃないけども、持っていたものが無くなっちゃたりとか、壊れちゃったりしているものを持ってる人たちもいるだろうなっていうのもあったし、震災だけじゃなくて、色んなものって、やっぱり思い出を持って毎日使ったりするよなって

いうのを思い出して、じゃあそういう熊本の人たちの思い出を描く屏風にしたいいいんじゃないかっていう発想から、そもそも熊本で展覧会やることは決まっていたので、その美術館さんに協力していただいて、広く公募をして、集めたものを描かせてもらったんです。すごく面白かったのが、アーティストって、自分が描きたいものがあるから描くじゃないですか。普段は。でもこの屏風って、僕が描きたいものって一個も無いんですよ。そういう作品って、まああんまりないですよ。言ってしまう。それって例えば、クライアントさんがいて、マリオ描いてくださいとかポケモン描いてくださいっていうのが僕が描きたいものじゃないっていうのともまた意味合いが違うし。描いているときはすごい不思議な感覚でした。

藤本 最近、利他の欲望みたいなことをインタビューで喋ったことがあるんだけど。自分のやりたいことじゃなくて、誰かが喜ぶことに対して、自分がなにかをやるっていう。人が喜び姿が見たいという思いは綺麗事じゃなくて、欲望としてあるんだっていうことを思っていて。以前、宇宙物理学者の佐治 晴夫さんっていう方の講演を聞きに行って、動物って色々いるけど、大体腹の中で結構成長して出てきますよね、でも人間の赤ちゃんだけは、すごい未熟なまま出てくるから、絶対親が手をかけてあげないと死んじやうと。だから人間だけは、何かをしてあげるっていうことに喜びを感じるようになってるんだという話をしている。なにかをしてあげるとかということが綺麗事じゃなくて、喜びであり欲望でありっていう。

山本 もうプログラムされてるかもしれないと。

藤本 みたいな話をされてて、僕はそうだなとすごい思って。これは太郎ちゃんが描きたかったモチーフではないかもしれないけど、太郎ちゃんがやりたかったことだし、描きたかった作品なんだろうなっていう風に思います。

ニッポン画の残す未来

藤本 太郎ちゃんの特徴は、日本画っていう独特の技法だったりとか、守るべきところはキープしなきゃっていうのが当然あって、それでなきゃ日本画じゃないっていうところがある中で、シンプルに現代的なモチーフが入ってくるっていう、そこの面白みだと思うんですけど。僕は、太郎ちゃん作品を見ていつも、落語家の桂文枝さんのことを思い出します。文枝さんって新作の創作落語をめちゃくちゃ発表する人じゃないですか。前にインタビューで「古典もみんな新作だった」と言うてはったんです。僕は太郎ちゃん作品をそういうことだなと思って見てるんです。これが単純な現代的なモチーフを持って「面白いでしょ？」っていう風に皆はただみてるだけかもしれないけど、太郎ちゃんは多分こういうものをもって将来の古典をつくらうとしているんだってことを思います。

山本 それはあえて言うていただくとありがたいですね。スタートの段階は割とそうなんですよね。おこがましいですけど、文枝さんのその視線にちょっと近くて。っていうのは学生時代に、たまたま能っていう芸能を習わせてもらって。京都造形芸術大学っていう今勤めに行っているところで、学生時代過ごしていて、ちょっと変わった大学だから、観世榮夫先生っていう、もうお亡くなりになったんですけど、そういう先生を呼んできて、授業もやるし、部活動の面倒も見てくれてたんですけど、とにかくはちゃめちゃな人でした。音楽業界から長らく離れた時期があって、舞台やっ



(左から) 山本さん、藤本さん

たりとか、映画やったりとか、役者業をたくさんやられて、能楽師に復帰されてからもその感覚のまま、新作をつくったりとか、っていうのをすごくやられてた方なんですよ。それをみて「そうか、400年くらい前のやり方で、新作作れるんや」とっていうのは思ってたんです。同時に最近一緒にお仕事させてもらうことも多くなった、茂山家っていう狂言のお家京都にあるんですけど、そこも本当にはちゃめちゃなお家で、なんでもやるんです。それこそ、落語家さんのコラボとかもたくさんやっています。その茂山家の同い年の宗彦くんっていう子も京都造形に通って、僕は熊本出身だから、大学入って知り合うんだけど、彼のことは知らないじゃないですか。ちょっとイケメンなお兄ちゃんが、能楽部でやたらとうまいわけですよ。それで、ライブのチケットを渡すかのように、公演のチケットをくれて。それを見に行ったら、新作をばんばんやあって。「こういうことできるんや」というのは思いましたね。そこからの発想も結構あるので、ありがたいですね。そういう風に受け取ってもらえるのは。

藤本 太郎ちゃん作品って、ともすれば、マリオやスターウォーズが描かれているものもあるから、アーティスト界のちょっとポップな役割みたいな感じもありますよね。

山本 完全にね、アーティスト業界の芸人キャラっていう感じもね。

藤本 それはそれでめちゃめちゃ大事な役割だと思うんですけどね。でもそこだけでとる人も多いですよね。

山本 そうですね。だから今回正直 A-Lab さんっていう場所を使わせてもらって、こういう失礼ですけど、例えば公立の美術館みたいに、たくさん人が来るとか、アートフェア東京みたいに、たくさん作品が売れるみたいな場所じゃないわけですよ。そういう所でこういう展覧会をやらせてもらう時に、なにやろうかなと思って。もちろんマリオも出てますけど、正直秋田でやってたプロジェクトとか、熊本のやつと

か地味だから、「売れるのか？」と聞かれても「他人の思い出欲しい人がどれだけののかな」みたいな話とかになるわけで。そういう場所では出来ないようなことをいっぺんにここでやっちゃおうかなと。意外とそういう仕事も秋田に行ってから特に地域と関わることも多くなっているけど、よく考えたら関西の人に知ってもらってないよなっていうのがあって。こういう機会があって、本当にこの展覧会は僕にとってすごくうれしい展覧会ですね。

藤本 そういう意味では、不思議な場所ではあるけど、それはそれで必然を感じるというか。元・公民館っていうところは、色々あるから、ひとつの事例としては中々先進的な感じじゃないですか？

山本 面白いですよ。本当にこういう場所をね、どんな使えるようになったら面白いのになと思って。僕がちょっと自分の中で少し不満があるとしたら、ホワイトキューブっぽく使ってるところがあるので、もう少しこの建物の地の部分をね、活かせる展示にしたらもっと良かったかなとは思いつつ。

藤本 まあでも難しいよね。白壁はやっぱり安心感あるよね。

山本 白壁はね、展示っぽくなりますからね。みなさん気づいてないかもしれないですけど、後ろの扉っぽいところ開けると、全面鏡張りなんです。公民館時代におばちゃんたちがダンスしたりとか、小さい子がバレエの練習したりとかにも使えるようなスペースとしてここは本当は機能していたんですよ。だから一個一個のお部屋に部屋の機能としてこういう部屋ですよ、っていう記憶があるんですよ。この建物には。美術館は逆にそういう記憶を消して、展示のためだけにつくられた真っ白なスペースで、無味無臭ですよみたいなスペースで。

藤本 本来はそうじゃないのに、ホワイトキューブ的な使い方をしているから、ちょっとどうかになっていね。

山本 今回はそれしかやりようがなかったんですけど。

ど。

藤本 実際は難しいですもんね。それこそプロジェクトになるしね。

山本 もっと練りこんでいけばできたかなって思います。誰か若い人でもっと挑戦的な人がやってくれたらいいんですけどね。

地域プロジェクトとアーカイブの力

山本 藤本さんも地域のことでやってるんですけど、僕はアーティストとして熊本のことだけではなく、なにができるかなっていうのを秋田行ってから特に色々考えるようになって、ひとつはさっきちらっと出てきましたけど、アーカイブ機能っていうのがあるじゃないですか。写真もそうだけど、普通にみたら日本画というか、作品っていうような捉え方をする人が多いんですけど、別の面で見ると、アーカイブができるメディアっていう風な切り口でもみれるよなって最近思っているんですよ。例えば何百年も前の屏風が残っていて、バツと開けると、かしこい人たちは文献読めばその当時のことがよくわかるけど、古典の文献をそのまま全部読める人なんて今では少ないわけで。逆に屏風をバツと開くと、その時代のことがなんとなく雰囲気として伝わる、記録されているっていうメディアで。しかもさっきのデジカメの写真は、意外に残っていないっていう話と一緒に、今のデジタルデータのメディアって変わってくるから「せっかくCDに焼いたのにこれ開かれへんやん」っていうことが今から普通になってきて、CD自体ももう古いメディアみたいになってくるんですけど、屏風は古すぎるから逆に開けるだけでいきなりみれるという誰でもアクセスできちゃうっていう良さがありますよね。

藤本 巻物とか屏風とかってそうですね。

山本 だからこれが100年越しに誰かが取っておいてくれて開けた時に、なんで熊のぬいぐるみが描かれてるかわからないけど、「なんか大切なものだから屏風に描いたんやろうな」ってことだけは残っていくこ

とになるのかな、ということはちょっとあって。それがアーティストとしてできることのひとつだになっているのを最近感じているんですね。だから上小阿仁プロジェクトの幕を作ったやつがあるじゃないですか。あれも皆さん想像しにくいと思うんですけど、秋田の中で一番の過疎の場所で、高齢者率ナンバーワン、人口減少ナンバーワン、自殺率ナンバーワンくらいの、ワーストが結構多いという。

藤本 そもそも村がもうあまりないからね。

山本 人口が2000人くらいなんですよ。なおかつメインの会場の八木沢集落っていうのが、10人住んでいないんじゃないかなくらいの。集落としては。年齢も平均年齢が70、80代だから。ってことは10年後どうなってんの？みたいなことを考えた時に、集落自体が無い可能性があるんですね。だけど、あそこでやられていた番楽っていう郷土芸能があるんですけども、八木沢番楽っていう名前なんです。っていうことは八木沢番楽が受け継がれていけば、八木沢集落に誰も人が住まなくなるとして、上小阿仁村の人たちがこれが八木沢番楽だっていう、練習している限りは、八木沢の記憶は残っていくんだろうなっていうのがあったんですね。名前は八木沢番楽なんだから、若い人がなんで八木沢番楽？八木沢ってどこやったっけ？ってなった時に、そういえば上小阿仁村に八木沢っていう集落があって、あそこに人が住んでたんだよなっていうのが引っ張り出されるのかなっていうのがあって。そういう風に本当になくなりつつあるようなものに対して、なにかちょっとアプローチしたいっていうのがあって、新しい幕を作ろうかなっていう発想になりました。

藤本 番楽っていうのは山岳信仰で、鳥海山だったり、八木沢っていうところも最後のマタギの人がいたりとか、そういうところなので、信仰的なところもあって、神に奉納することも含めて番楽っていう伝統が残っていて、その背景は皆布に描かれているんだよね。すごいおっきい上りみたいなやつで、それが八木沢に限

らず色んなところ秋田県内でのぼってるんだけど、八木沢はほんまにいいよもうね、無くなっちゃうっていう感じになっていて。

山本 ただ、一応、八木沢番楽自体は上小阿仁村の小中学校の授業の中に取り入れられたので、これまた面白くて。おじいちゃん世代か、小中学生しかできないんですよ。間の40代50代の一番やらなあかん人たちが「俺らみたことあるけど出来ないもん」みたいな感じなんですよ。でもようやく途切れそうだった糸が繋がれつつあります。上小阿仁プロジェクトっていうものはじめた柴山さんっていう方が、当初から「これアートプロジェクトじゃないからね」ってずっと言ってやられて。アートに限定しちゃうと、番楽とか扱えないじゃんみたいなのがあって。最初からアートの展示もやりながら、初年度とかね、番楽サミットみたいなのもやって、各地の番楽を呼び寄せて、講演会やったりとか、披露があったりとか、その流れが今も郷土芸能広間みたいなコーナーで残ったりするので、そういう意味でも地域にとって、アートがよく地域活性化になってほしいと言われているのでやらされるというか、期待はされるんだけど、絵一枚置いたくらいで、人口増えへんし、出生率がへんし、そういうことはできないんだけど、そうじゃなくてそもそも地域にあった大切なものを大切なんだなって地域の人が自覚するようなことのお手伝いが少しできるのかなっていうように思ってた。藤本さんはまさしく



山本太郎さん



藤本智士さん

そういうことを先々遇もやってきたばかりですよ。秋田で。

藤本 「いちじく市」ね。その話の前にひとつ前提としての話をすると、池田修三さんっていう木版画家が2004年に82歳とかで亡くなってるんですよ。当然僕もお会いしたことないんだけど、秋田県にかほ市っていう一番県南のところに出身の人で、その人の木版画の作品がめちゃめちゃ良いんです。その作品に出会ったのは、「のんびり」をやる前で。秋田には毎年のように行って、友達もいて、その友達の家飾ってあったのが最初の出会いでした。女の子のモチーフが多くて。可愛らしいんですけど、皆目に影があるんですよ。一本刷ってあって。最初はかわいいと思ってたんだけど、よくみるとなんか深刻やなとか、何考えてるのかな？みたいな感じで。それを僕はイコール秋田っぽいなと思ったんです。関西人として。自殺率ナ日照時間が一番少ないんですよ。

山本 生物心理学的にしんどくなりますよね。

藤本 そういうのも絶対あるし。めちゃめちゃいいところなんですけどめちゃめちゃ雪深いから寄せても寄せても雪が降ってくるっていうあの不毛なやつは本当にしんどくなるやろうなっていう。だから「いいところだけど辛いよね。」っていうのも全部ひっくるめて、その作品の中に、それを越えた強さみたいなものが全部入ってると思ったから秋田っぽいなと思って、聞いてみたら確か、秋田県にかほ市出身の池田修三って人

やと思うってその友達が教えてくれて。そこから周りの秋田の友達に色々聞いてみたんですよ。「池田修三って知ってる？」って。そしたら誰一人知らなかったんです。それでも作品の写真を見せたら、家にあるとか言い出すんですよ。

山本 みんなね、各家に1枚あるくらい

藤本 本当に。一番面白かったのが、新築とか結婚とかのお祝いでよくあげたりもらったりしたのとかね。僕が20代の頃にアートイベントを関西でやってたりとかしてた時って、「なんでみんなアーティストの作品買ってくれへんのやろ？」っていうのが一番あったんです。友達のを皆が買ってくれたらいいのっていう。なのにですよ、買ったりあげたり、もらったりしたみたいなのが当たり前におこなわれていてなんじゃこりゃと思って。「俺が10年以上前に求めてたやつをすでにやっている人たちがいたや！」みたいな。で、まあおもしろくて、池田修三さんの故郷にかほの町に降り立ったんですよ。当初はまあ池田修三のいの字もないんですよ。なんにもなくて、観光パンフレットみたいなものにもなにも載ってない。なんじゃこれと思ったけど、一軒お店に入って聞いてみたら、奥から出してこられて。表に出てなくて、家に飾ってるんですよ。前に出すもんじゃなくくらいあたりまえに浸透してたんです。それはすごいと思って、「のんびり」で取り上げてました。行きにくいところなんだけどもじめてその地元で展覧会やったら、「のんびり」でしか告知してないのに、2500人来たんですよ。長崎や横浜から行きにくいところに2500人来てくれて。2年後には生前にもかなわなかった秋田県立美術館での展覧会をやったら、10日間で1万3千人とか。それはいまだに草間弥生さんや篠山紀信さんの展覧会をやるのと、最大動員を抜かれてないんです。それくらいめっちゃ再ブレイクして、池田修三っていう人のことを介して僕は秋田県にかほ市にすごく足しげく通うようになりました。めっちゃ風光明媚ですごいいいところで飯もすごく美味しくてっていうところなんです

けど、僕は正直アートっていうので頭打ちになるっていうのを編集者的にプロデューサー的でいやらしいかもしれないんだけど、考えていました。やっぱりアート人口って少ないっていう感じが僕ははっきりとあったんで、この池田修三で盛り上がって今駅前に行ったら「池田修三の町へようこそ」って急に手のひら返したようになっていて、秋田空港でも「池田修三の故郷」って書いてあって。そういうことをできるのが編集の力なので、それは僕はすごいやりがいはあるんだけど、でもその一方で、これでこのにかほの町に来てほしいとかっていうのには限りがあるから、やっぱり“食”でなにかやりたいなっていう思いがありました。池田修三もいいけど、にかほっていう町は北限のいちじくって言われるいちじくの産地でもあるので、それをベースにした「いちじく市」っていうイベントをやりました。これもまた廃校になった学校が会場で、車でないと絶対来れません。でも鳥海山がみえてきれいといいとかやっしてっていうので、とりあえずそこにして何とか1000人集めようと思って、頑張ってみて、ふた開けたら5000人来たんですよ。2キロ先まで渋滞になって。田んぼのへんとかに皆平気で車停めるから警察にもめっちゃ怒られて。そういうことを続けて、つい二週間前に3年目のいちじく市があったんですけど。そういう地域を盛り上げていくみたいなことって、簡単にみんな割とアートっていうけど、やっぱりそれに対しては懐疑的というか。

アートの力・役割

山本 僕はそれでいいと思っていて。アートは微力ですよやっぱり。越後妻有とか、直島みたいな成功例があっちゃうから、みんなアートだったら地域活性化するって思いこんでるけど、正直そこまでの力はないよ、本当に。

藤本 難しいところで、アートに力があるってはいえるんですよ。もちろん。すごいそこを信じているけれども、アートってなんだろうっていうのが、僕は今

の皆が無思考にバツと思うファインアートの世界だけじゃないんじゃないですかっていうのを思っていて。僕は最高のアーティストはビートルズだっていうのがあるんです。アートの最大の爆発力って、革新的であって大衆性があるっていう両方兼ね備えていることだと思うんですよ。革新性があるだけじゃ人々は理解しないし、だけど大衆に迎合するだけでももちろん駄目で、ここの2つが両立しているのって、多分ビートルズぐらいしかいないんじゃないかってすごく思っていて。革新的なのに大衆性があるっていうのをキープできるものっていうのはそうそう出てくるもんじゃないと思うんです。でもそれって僕はすごくアートだと思うし、すごくそれがアーティストックだと思っている。そういう意味のアートっていうもので僕は自分なりにやっていきたいって思っているから、世間一般の思うアートと自分のものとはズレるなっていうのはすごく思ったりします。

山本 僕も力がないって言ったんですけど、役割が違うと思っていて。さっきも言ったみたいにこの屏風が数百年残るとか、っていうのは、この一瞬に関しては、すごく弱いエネルギーかもしれないけど、それがずっと持続しますよみたいなこともある一方でアートの力だし。とか思うと、やっぱりでも地域の行政が求める活性化って、そういうのじゃなくて、もうちょっと爆発力じゃないですか。そういうのって本当にアートが持ち得る場合もあるけれど、全部が全部のアートが持っているわけじゃないから、それこそ編集の力とか、藤本さんのような人とか、あるいはアートの業界でいうと、キュレーションとか、ディレクションをするような人たちと一緒にやらないと、アートが本来持っている力っていうのは引き出せて来ないので、ただアーティストがいてその人の作品を廃校になった小学校に置けば地域活性化するかっていわれたらそうじゃないですよ。その辺の勘違いは世の中的にちょっと起こっているなと思っています。古いものと新しいものをどうミックスさせていくのかっていう部分で、藤本

さんだって地域のことやってるから、全てそれに関わっている秋田なり、熊本でもいいけれど、全部新しいものに置き換わっていくことが是ではなくて、そういう新しいテクノロジーは活かしていくんだけど、その地域ごとにずっと育まれてきた生活みたいなものは大切にできるようなそのバランスがうまく取れるような世の中になっていくといいですね。

藤本 日本画っていうものが継続していくためにはチェンジし続けないといけないというか。明治のチョコレートのロゴが微妙にずっと変わり続けているのと一緒に、常にすごくスタンダードなものと皆が思いこんでるものは実は全部微妙に時代に合わせて変化しているものなんです。だからこそ今も続いている。だから日本画の世界だって所謂、ザ日本画っていうものを、これを守るんですっていう伝統芸能、伝統工芸になっていくと、やっぱり無くなっていく。そこにチェンジしていく人、新しい風を吹き込ませようとする人がいると、その世界っていうのは伝統として繋がっていくから、そこを勘違いしている世の中の風潮っていうのはあるんじゃないかなと思うんだよね。

山本 そろそろ時間で、ここは尼崎の施設なので、尼崎市的にまとめると、今度新しくできる尼崎城もそういう風に伝統を活かして、元々はお城っていう伝統的な建物だったはずのところを皆が集えるようなスペースに。見るだけのお城にしないんですって。中に入っでわいわい遊べるような場所にしたいっていったるんでそういう風に繋がっていくといいですね。

A-Lab Workshop

作品探検ツアー

小学校6年生までの子どもを対象に、山本太郎さんと一緒に、“展覧会”を探検するツアーを開催しました。

講 師 山本太郎さん(出品作家)
日 時 平成30年10月8日(月)祝
午後2時から3時30分
場 所 あまらぶアートラボ(A-Lab room2)
参加者数 9名



時代とあそびたびするつる

A-Lab Exhibition Vol.15

山本太郎展

伝統的な日本画の技法で、現代の景観や風俗を描く「ニッポン画」を提唱し、制作してきた山本太郎。ここ数年は、教員として赴任した秋田や出身地の熊本、学生時代を過ごした現在の活動拠点である京都など、日本各地を転々としながら、それぞれの地域に根付いたプロジェクトを展開しています。今回は、山本がこれまで手がけてきたうちの代表的なプロジェクトに注目し、各展示スペースを構成しています。

Project 1 アケオメリクリ

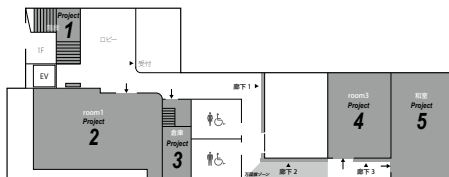
2017 年 12 月から 2018 年 1 月にかけて、秋田公立英徳大学サテライトギャラリー・ビヨンプォイントを、クリスマスとお正月の兼取である紅白の空間に変えたプロジェクト、アケオメリクリ。その建築のデザインには、足利光庵の墨画『紅白梅図屏風』を現代的にリミックスした山本の作品『清涼飲料水紋図』が用いられました。今回、そのプロジェクトを A-Lab 仕様により変え展示します。また、ビヨンプォイントでは展覽会館附設クリスマスパーティーを開催しました。作品を舞台に秋田舞妓が舞うなど、その時の模様を映像で紹介します。

アケオメリクリ 山本太郎の紅白の階段	カットイングレート / サイズ可変 / 2018
《清涼飲料水紋図 Red & White》	紙本金地着色 / 53×33.3cm / 2018
《清涼飲料水紋図 Strawberry Moca》	紙本金地着色 / 33.3×34.3cm / 2018

Project 2 熊本ものがたりの屏風

2016 年の熊本地震で被災した装表具材店から、捨てられることになっていた屏風などを山本が譲り受けて修復し、そこに公衆で集められた熊本に住む人々の思い出の品々を描いたプロジェクトです。

《熊本ものがたりの屏風 みんなの思い出展(高島屋)》	紙本金地着色 / 各 15.5×90cm、二曲一巻、三折 / 2017
《熊本ものがたりの屏風 いと小さきもの小屏風》	紙本金地着色 / 36.5×95cm、二曲一巻 / 2017
《熊本ものがたりの屏風 女性のいのちの金目屏風》	紙本金地着色 / 36.5×186cm、二曲一巻 / 2017
《熊ヶ崎園屏風 櫻木ノル本》	紙本金地着色 / 152.2×365.2cm、六曲一巻 / 2016



尼崎城プロジェクト関連企画

Project 3 コラボレーションプロジェクト

倉庫

山本と手塚本郷和紙本出版社の芸術家、ゲームメーカーの任天堂、男のさものえいたろう屋や陶芸家、吉川真一氏とコラボレーションして生み出した本展覧や浴衣、茶碗などを展示します。

《山本太郎国家 芸術家制作 マリオ & ルイージ図本展覧》	©Nintendo 山本太郎 2015
本展覧 / 66×30cm / 縦寸 / 2015	
《アイコ帳造り》	江崎 / 男性用浴衣 / 2017
《ワラ染 尼崎の産物》	13.2×6.3cm / 2017 / 個人蔵
《ワラ染 富士に新幹線図本展覧》	11.2×8.8cm / 2014 / 個人蔵

万歳旗ゾーン

廊下 2

《つきのわくま(バンダカー)》	紙本金地着色 / 33.3×53cm / 2017
《万歳旗 横断》	紙本金地着色 / 24.2×33.3cm / 2011

Project 4 平成版八木沢番茶帳幕 (かみこあにプロジェクト 2017)

room 3

マダガの室として知られる秋田県上村に、ここで 2012 年から始まった芸術家 (KAMIKOANI プロジェクト) 2016 年より「かみこあにプロジェクト」と題し、に初年時から参加している山本が、2017 年に県庁所在地である八木沢地区に伝わる郷土芸能「八木沢番茶」のための新しい帳幕を制作しました。それまで使われていた帳と新しい帳、そして新しい帳のために描かれた原画を展示します。

《八木沢番茶帳幕》	水染 / 染色 / およそ 530×190cm / 制作年不明
《平成版八木沢番茶帳幕》	上村町八木沢地区公民館蔵
	約 2.5m の幅にプリント / およそ 530×190cm / 2017
《平成版八木沢番茶帳幕原画》	上村町八木沢地区公民館蔵
	紙本金地着色 / 72.7×50cm / 2017

廊下 3

Project 5 羽衣(ブルー) (KAMIKOANI プロジェクト秋田 2014)

和室

伝説の「羽衣」のクライマックスで、美女が自分の羽衣を返してもい人国に浮遊しなら帰るシーンを描いて表現した「羽衣(ブルー)」屏風。その屏風のまわり、たくさんの人物の風俗を置いています。観客のみさん、その中に入って風俗をみたり、そこから風俗をひとつだけ持て帰ることができ、その代わりとして、その場で新しい風俗を作った補充していただく、作品と観客が双方向的に関わることを目指したプロジェクトです。

《羽衣(ブルー)》	紙本金地着色 / 各 172×189cm、二曲一巻 / 2014
-----------	----------------------------------

会場配布資料

あまらぶアートラボ A-Lab archive vol.17
Exhibition vol.15「時代とあそぶ たびする つくる」山本太郎展

2019（平成31年）12月 初版第1刷発行

制作・編集・発行 尼崎市 シティプロモーション事業担当
展示撮影 表恒匡
